

平成24年10月4日

大和文華館 特別展の開催について

近鉄では、文化・スポーツ事業の中核施設として、大和文華館を運営しています。

このたび、同施設にて10月7日（日）から11月11日（日）まで、特別展「清雅なる仏画
— 白描図像が生み出す美の世界 —」を開催いたしますのでお知らせいたします。

同期間中は、同館学芸員による列品解説のほか、有識者による講演会なども実施いたします。

詳細は別紙のとおりです。

特別展 清雅なる仏画

—白描図像が生み出す美の世界—

[共催:日本経済新聞社/後援:(株)近鉄百貨店・近鉄不動産(株)]

会期

2012年10月7日(日)～11月11日(日)

(前期:10月7日～10月28日)

後期:10月30日～11月11日)

休館日:毎週月曜日

(ただし、10月8日[祝]は開館し、翌9日[火]が休館)

開館時間

午前10時～午後5時

(入館は午後4時まで)

入館料

一般 900円

高校・大学生 700円

小学・中学生 無料

(20名以上の団体は相当料金の2割引で引率者1名無料)

列品解説

毎週土曜日、10月7、8、10、11、12日

午後2時から展示場にて 当館学芸員による

講演会

10月21日(日)

「善財童子、求法の旅

—華嚴五十五所絵をめぐって—

神戸大学教授 百橋明穂氏

10月28日(日)

「白描図像と描線の美」

福岡市美術館館長 錦織亮介氏

11月4日(日)

「仏画の『仲間捜し』—図像研究の楽しみ—」

慶應義塾大学教授 林温氏

日曜美術講座

10月14日(日)

「清雅なる仏画—白描図像の魅力—」

当館学芸員 古川攝一



金剛索菩薩(金胎仏画帖のうち)平安時代後期 大和文華館蔵

展観趣旨

本展観は、白描図像が持つ特有の観賞性に注目し、その魅力をご紹介します。仏の姿や形を記す「図像」は、宮中での密教修法の盛行と並行して、平安時代半ば頃から盛んに著されるようになります。簡略な筆致で描かれた、学侶が日常に用いるものから、本尊画像に匹敵するような観賞性の高い図像も描かれるようになります。専門の絵仏師のみならず、優れた画技を持つ僧侶によっても描かれました。珍海・玄証・信海・深賢といった平安時代末期から鎌倉時代にかけての画僧が知られています。このような図像の集積が、鎌倉時代以降の作例に見られる、經典の規範から解放された、学侶や発願者の思想を強く反映した仏画制作へと繋がります。

展覧会では画僧や絵仏師によって著された図像、中でも関連する作例が数多く伝わる「玄証本図像」、詫間為遠筆の伝承を持つ「金胎仏画帖」を中心に、表現上の特色を考察します。これらの図像には、単なる転写に留まらない独特の画趣が現れ、同時代の彩色された仏画と共通する表現上の特色や形態把握の感覚が見出せます。さらに、複数の図像を抽出し一図に再構成して描いた仏画に注目します。図像が単なる「ほとけの形」の継承に留まらず、構図や表現にまで新たな影響を与えた点を明らかにしたいと思います。

また、今回注目する作品は、東大寺・勸修寺・高野山に関わるものが多く、諸作例の比較を通じ、白描図像を介した学侶や画僧、絵仏師のネットワークが機能していた可能性を提示します。線描で描かれた図像から生まれた清雅な美の世界をお楽しみ下さい。

展観構成

1 白描図像の美—図像の集積と解析—

仏の姿を描いた図像は、印相や持物といった、仏を区別するために必要な情報と共に記され、数多くの遺例が現存します。特に仏の数が多い密教において、様々な図像が描かれ伝えられてきました。こうした図像は容易く見られるものではなく、当初は法統を継承する師弟子の間でのみ披露され、伝えられたようです。ところが、宮中での密教修法が盛んに行われるにつれて、秘すべきとされてきた図像が、その制約から解放されるようになります。多くの学僧達が図像を収集し、解析を行い、写すようになります。中には、単なる仏の形の継承に留まらず、本尊画像に匹敵するような美しさを意識した図像も描かれるようになり、自然と能筆の僧侶や絵仏師がその制作に携わるようになりました。珍海・玄証・信海・深賢といった優れた画技を備えた画僧の登場です。ここでは、能筆の僧侶によって描かれた白描図像の優品を展示します。肥瘦のある生き活きとした描写や最少の彩色から生まれる、白描図像特有の画趣をお楽しみ下さい。



重要文化財 戒壇院厨子扉絵図像・部分 平安時代後期 奈良国立博物館蔵



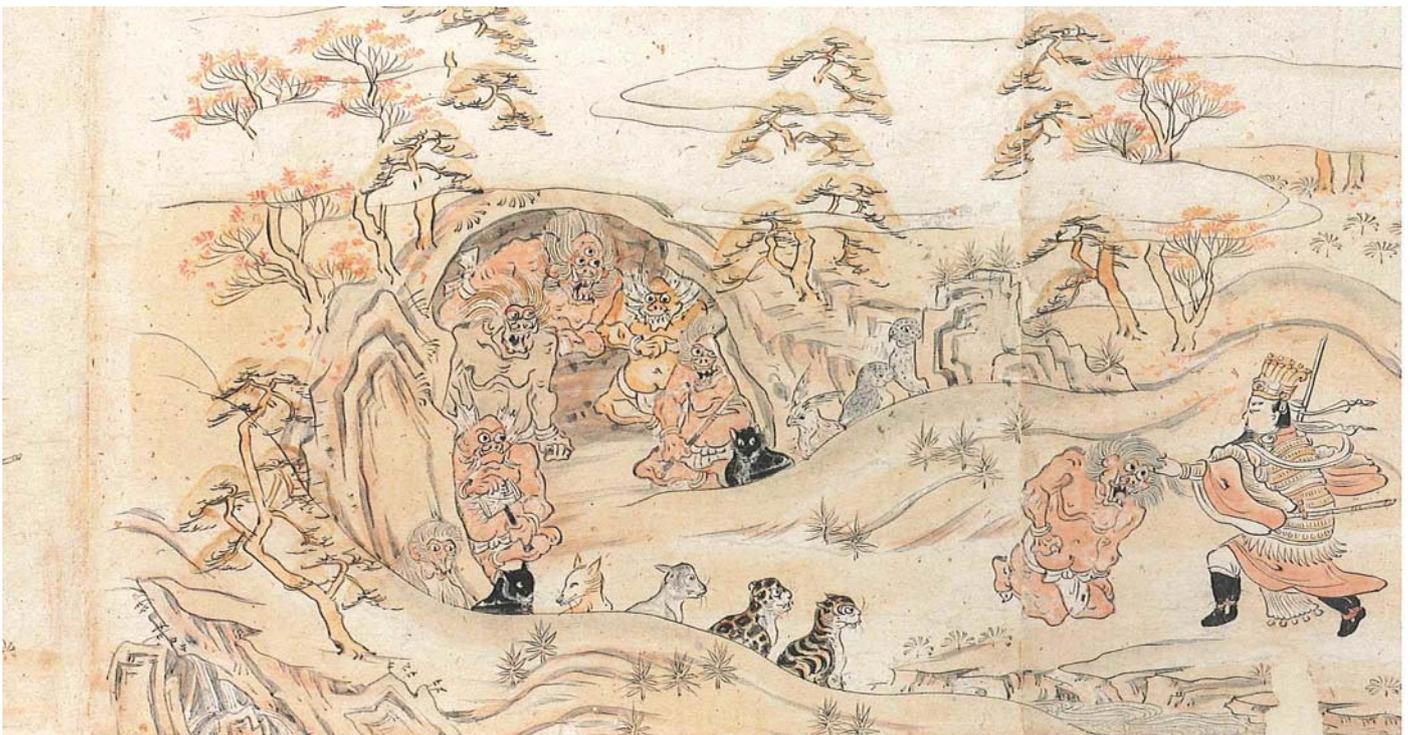
十六善神図像・部分 治承三年(1179) 東京国立博物館蔵

2 白描図像の展開

白描図像に描かれた神将形や邪鬼に注目すると、肥瘦の強い墨線で生き活きと尊像を描き出し、杏仁形の瞳を大きく描く顔貌表現は愛らしい雰囲気を持ちます。この、愛らしく諧謔味のある描写は、同時代の彩色された仏画にも見出すことができます。図像に見られる描線の特徴や造形感覚が、彩色された仏画、すなわち本画の表現へ影響を与えた、あるいは、描いた人々が共通することが想定できます。



重要文化財 守護一切城増長威力主夜神(華嚴五十五所絵のうち) 平安時代後期 根津美術館蔵【後期展示】



重要文化財 十二因縁絵巻・部分 鎌倉時代 根津美術館蔵【10月7日～11月4日展示】

3 白描図像の絵画化と再構成

本画である彩色された仏画は、図像を土台として描かれます。中には複数の異なる図像を組み合わせて一図に再構成した作例も見られます。典拠となった図像は、過去の由緒ある作例を写したもの、あるいは最新の宋請来図像などが挙げられます。こうして描かれた仏画は、経典の規範から解放され、より直接に学侶や発願者の意図が反映されたものです。一方、由緒ある本尊画像は、図像として忠実に転写されます。本尊の聖性までも写そうとする姿勢が見て取れます。ここでは、白描図像の集積と解析によって、新たな仏画が生み出される様子をご覧ください。



諸尊集会図 鎌倉時代 東京国立博物館蔵



国宝 善女龍王像 定智筆 久安元年(1145) 金剛峯寺蔵



重要文化財 薬師十二神将像 鎌倉時代 桜池院蔵



金輪仏頂図 鎌倉時代 大阪市立美術館蔵